

## 『落窪物語』の食

— 姫君と道頼の結婚を中心に —

## 一 はじめに

『落窪物語』内で落窪の姫君（以降、落窪の姫君の呼称は「姫君」とする）の侍女のような存在であるあこきは、聡明さと快活さ、人懐こさをもつ魅力的な人物として描かれている。その魅力を存分に發揮し、姫君と道頼を結婚に導いたわけだが、あこきの活躍が最も目立っているのは、姫君と道頼の結婚四日間である。既に指摘されているように、『落窪物語』は婚姻儀礼を詳しく叙述している物語であるが、<sup>(2)</sup> 姫君の身なりを人並みに整え、婚姻儀礼の準備をし、きちんと道頼を迎えて朝には道頼を送り出すなど、あこきの奔走の様子も、その叙述の一端を担っている。そしてあこきの奔走は、食べものの所望や三日夜餅・朝の粥の用意というように、食との関連が高い。

本稿では、姫君と道頼の結婚四日間におけるあこきと食の関連を見ていくことで、『落窪物語』の食が何を描き出そうとしているのかを考察していきたい。

## 二 食べものの所望

道頼が突如中納言邸へ忍び込み、強引に姫君と一夜を共にしたため、あこきは急遽結婚の準備に追われることになる。中納言邸で虐げられている姫君は、十分な調度品を持っていないため、あこきは和泉守の妻である裕福な叔母に所望の手紙を出し、几帳などを借りることで、結婚二日目の夜に備えている。

さて、結婚三日目である。あこきは姫君と道頼のために「今宵、餅、いかで参るわざもがな」（五七頁）との思いから、叔母のもとへ手紙を送る。

いとうれしう、聞こえさせたりし物を賜はせたりしなむ、喜び聞こえさす。また、あやしとは思さるべければ、今宵、餅なむ、いとあやしきさまにて用侍る。取り交すべき果物など侍りぬべくは、少し賜はせよ。客人なむ、しばしと思ひ侍りしを、四十五日の方違ふるになむ侍りける。されば、この物どもは、しばし侍るべきを、いかが。盃、半挿の清げならむと、しばし賜はらむ。取り集めて、いと傍らいたけれど、頼み聞こえさす

るままに（五八頁）

この手紙に対し、叔母は様々な品物とともに、次の手紙をあこきへ送る。

昔の人の御代はりは、あはれに思ひ聞こえて、女子も侍らねば、娘にし奉らむ、身一つはいとやすらかにうちかしづきて据ゑ奉らむと思ひて、さきさきも御迎へすれども、渡り給はぬこそ、恨み聞こゆれ。物どもは、いとよかなり、いかにもいかにも使ひ給へ。盃・半挿奉る。あな異やう。宮仕ひする人は、かやうの物、必ず持たるは。なきか。今までは頼まざりつる。身になきは、いと見苦しきを、いとあやしきこと、奉る。餅は、いとやすきこと、ただ今して奉る。物の具・餅など召すは、御婿取りし給ひて、三日の設けし給ふか。まめやかに、いかで対面もがな。いと恋しくなむ。何ごとも、なほのたまへ。「時の受領は、よに徳あるもの」と言へば、ただ今そのほどなめれば、仕まつらむ（五九〜六〇頁）

あこきは三日夜餅を所望するために叔母へ手紙を書いているが、手紙の中には結婚を表す直接的な文言はない。「今宵、餅なむ、いとあやしきさまにて用侍る」と述べただけである。それにも関わらず叔母は、夜に餅が必要なこと、盃や半挿の要求などから「物の具・餅など召すは、御婿取りし給ひて、三日の設けし給ふか」と、鋭く結婚を察している。

さて、あこきの所望に対し、叔母はどのような品物を送ってきたのだろうか。あこきの所望「取り交すべき果物など侍りぬべくは、

少し賜はせよ」に対して「大きな餌袋に、い米入れて、紙を隔て、果物・乾物包みて」（六〇頁）を送ってきており、「果物」に「い米」「乾物」が追加されている。語り手は「いとくはしくなむおこせたりける」（六一頁）と好意的に評しているが、あこきもまた「今宵はただをかしきさまにて餅を参らむと思ひて、取りて、よろづに、果物・栗など掻き居たり」（六一頁）と、有効に利用しようだ。『新版落窪物語』には「い米」について「底本「いこめ」未詳。【三八】の注一四に、「かの白き米」とあるから、「白米」（白い米）の誤りか」とあり、この注釈に従うと、「い米」は結婚四日目の朝、道頼と姫君に食事を供する際、精進落としの料理と交換するのに使われたようである。そして餅は、「日やうやう暮るるほど」（六一頁）に、「草餅二種、例の餅二種、小さやかにをかしうして、さまざま」（六一頁）に送られてきた。今宵餅が必要だということであえて日が暮れてきた頃に送ってきたのだろう。しかも、三日夜餅としても使えるよう、様々な餅を用意している。配慮が行き届いたこれらの品物に、あこきも感激しようで、「すべて、聞こえさすれば、世の常なり」（六一頁）とお礼の返事を出している。

それではなぜ叔母は、配慮が行き届き、あこきからも感謝されるような品々を、送ることができたのだろう。叔母が気配りのできる性格であったから、というのももちろんそうであろうが、あこきのことを実の娘のように恋しく想っていたからではないだろうか。先ほどの叔母の手紙をもう一度見てみると、「昔の人の御代はりは（中略）恨み聞こゆれ」「いかで対面もがな。いと恋しくなむ」とい

うように、あこきを娘として引き取りたかったことや、恋しく想っているのを会いたいという気持ちが続られている。あこきを実の娘のように恋しく想うからこそ、あこきの状況や気持ちを慮り、行き届いた品々を送ることができたのだろう。あこきが叔母に餅と果物を所望する場面からは、叔母のあこきに対する、母親（代わり）としての想いが読み取れるのである。

ところで、叔母があこきを娘のように想っているのと同様に、あこきも叔母のことを実の母親のように想っているのだろうか。それは「いささか考えにくい。叔母が「昔の人の御代はりは（中略）恨み聞こゆれ」「いかで対面もがな。いと恋しくなむ」と、あこきへの想いははっきりと表明しているのに対し、あこきは物を送ってくれたことに感謝はしているものの、叔母のことをどう思っているのかについては、表明していないからである。この、やや一方通行ともいえる母娘関係については後述すると、次に帯刀が自分の母親（道頼の乳母）に食べものを所望する場面を見てみよう。結果として結婚一日目となった日の出来事である。

中納言一家が石山詣でに出かけた日、帯刀は中納言邸へ向かうことになったのだが、中納言邸には食料が無いであろうと、気を利かせて果物を届けようとする。そのため「をかしきさまならむ果物一餌袋して置い給へ。今ただ今取りに奉らむ」（三三三頁）というように、母親へ果物を所望する。帯刀が母親のもとへ使者を送ると、母親から「餌袋二つして、をかしきさまに入れて入れたり。いま一つの大きやかなるには、さまざまの果物、色々の餅、薄き濃き、入れ

て、紙隔てて、焼米入れて」（三四頁）が届く。

母親から届いた餌袋に対して、語り手は「さうざうしげなる気色を見て、いかではかなき心ざしを見せむと思ひてしたるなりけり」（三五頁）と、好意的に見ているようである。しかし、あこきは少し違う。あこきは餌袋を見て「いで、あやし。まめ果物や。けしからず。そこにし給へるにこそあめれ」と怨<sup>4</sup>じており（三五頁）、特に「まめ果物」が届けられたことに対して、少なからず困惑し、帯刀を怨んでいるのである。『新編日本古典文学全集』の頭注には、「焼米は本来、旅行などに携帯する実用的な食物で、菓子<sup>5</sup>の類ではなかった。だからここでは、焼米を、「まめ（実用<sup>4</sup>の意）な菓子」と言った」とあり、「まめ果物」とは「焼米」のことを指していると考えられる。『うつほ物語』「国譲中」巻には、正頼が実忠の北方のもとへ焼米を贈る場面があるので、誰かに焼米を贈るという行為が失礼に当たる、というわけではないらしい。それではなぜ、あこきは焼米が届けられたことに対して困惑しているのだろうか。

ここで、「まめ果物」の焼米について考えてみよう。語り手が「さうざうしげなる気色を見て、いかではかなき心ざしを見せむと思ひてしたるなりけり」と述べているとおり、帯刀の母親は食料が無くて困っているだろうから手助けしたい、という純粹な気持ちから焼米を送ったのかもしれないが、あこきはその行為を「息子（帯刀）の食事の世話ができない嫁」だと姑に思われている、というように解釈したのではないか。本来、夫の世話は妻及び妻の家族が行うものであるから、夫の実家から間食用などではない実用的な食べ

ものが送られてくるということは、夫の食事の世話をできない妻だと姑からみなされていると受けとれる。あこきもそのように受けとり、妻としてのプライドを傷つけられたのではないだろうか。だからこそ、焼米が届けられたことに対して困惑しているのだと考えられるのである。後で詳述するが、姫君と道頼の結婚四日間、あこきは姫君と道頼へ食事を供することに執着している。帯刀の母親から焼米を送られてきたことをきつかけに、「妻（の家族）が夫の世話をする」という意識が強まったのかもしれない。

先ほど、あこきが叔母へ食べものを所望する場面では、あこきの所望「取り交すべき果物など侍りぬべくは、少し賜はせよ」に対して「大きな餅袋に、い米入れて、紙を隔てて、果物・乾物包みて」を送ってきており、「果物」に「い米」「乾物」が追加されている、と述べた。これは、あこきの状況や気持ちを慮った行為であり、あこきは感謝の気持ちを抱いている。一方で、帯刀が母親に食べものを所望する場面では、帯刀が「をかしきさまならむ果物一餅袋して置い給へれ」と所望したのに対し、母親は「餅袋二つして、をかしきさまにして入れ」たものを送ってきている。「をかしきさま」は帯刀の依頼通りだが、「一餅袋」の依頼に対して母親は「餅袋二つ」を送ってきており、ここから母親のお節介な性格が見受けられる。さらに、焼米を送ってあこきに困惑されている様子からは、相手の気持ちを慮れず、自身の考えや行動が相手のためになり、正しいことであると思込んでしまう人となりが見えるのである。なお、帯刀の母親のこれらの性格は、後の道頼と右大臣の娘との縁談でも

あらわれている。帯刀の母親のもとに持ち込まれた道頼と右大臣の娘との縁談を、道頼が断つたにもかかわらず、「道頼のため」と勝手に推し進めるのである（道頼と帯刀が帯刀の母親へ抗議した結果、縁談が成立することはなかった）。

帯刀が母親に食べものを所望する場面では、あこきと帯刀の母親の、いわゆる嫁姑関係を垣間見ることができる。また先述したとおり、あこきが叔母に餅と果物を所望する場面からは、叔母とあこきの、まるで実の母娘のような関係を読み取ることができた。このように、『落窪物語』の食べものを所望する場面では、食べものを所望された人物の性格及び人となりや、食べものを所望した人物と所望された人物の関係が、描かれているのである。

### 三 三日夜の餅と朝の粥

第二節で触れたように、あこきは姫君と道頼の結婚三日目に「今宵、餅、いかに参るわざもがな」との思いから、自分の叔母に餅を所望する。次に掲げるのは、あこきが三日夜餅を姫君と道頼に供する場面である。

あこき、この餅を箱の蓋にかしう取りなして参りて、「これいかで」と言へば、君、「いと眠たし」とて起き給はねば、「なほ、今宵御覽せよ」とて聞こゆれば、「何ぞ」とて、頭もたげて見上げ給へば、餅をかかしうしたれば、少将、誰、かくをかしうしたらむ、かくて待ちけりと思ふも、されてをかしければ、「餅にこそあめれ。食ふやうありとか。いかがする」とのたま

へば、あこき、「まだやは知らせ給はぬ」と申せば、(道頼ガ)「いかが。一人ある間は食ふわざかは」とのたまへば、(あこきガ)「切らで、三つとこそは」と申せば、(道頼ガ)「まさなくぞなる。女は、いくつか」とのたまへば、(あこきハ)「それは、御心にこそは」とて笑ふ。(道頼ガ)「これ参れ」と、女君に参り給へど、恥ぢて参らず。いと実法に三つ食ひて、(蔵人の少将も、かくや食ひし)とのたまへば、「さこそは」と言ひて居たり。(六九〜七〇頁)

道頼は、世間で「いみじき色好み」(二二頁)と噂されている割には、三日夜餅の食べ方を知らないようで、あこきに食べ方を聞いている。そしてあこきに言われたとおり、律儀に餅を三つ食べている。この場面で道頼は、「蔵人の少将も、かくや食ひし」とあこきに尋ねている。蔵人の少将とは、姫君の異母姉・三の君の夫である。あこきが三の君の侍女であるため、三の君と蔵人の少将が三日夜餅を食べた様子を、あこきに尋ねたのであろう。道頼の質問に対し、あこきは「さこそは」と答えているが、「さこそは」には「さこそは(ありけめ)」と、「ありけめ」が省略されている可能性があり、その場合はあこきが「そうでございましょう」と推量で答えていることになるので、実際に三の君と蔵人の少将が三日夜餅を食べたかどうかは定かではない。また、物語内で三の君と蔵人の少将が三日夜餅を食べる場面も描かれていない。

これら二組の夫婦の婚姻関係であるが、姫君と道頼が生涯に渡って関係を継続させたのに対し、三の君と蔵人の少将の婚姻関係は破

綻している。あこきに三日夜餅を供され、それを食す場面がきちんと描かれている姫君・道頼と、三日夜餅を供され食す場面が描かれない三の君・蔵人の少将夫婦。「落窪物語」では、妻方の人物、特に母親が食べものを供し、婿となる男がそれを食する場面を描くことで、持続する夫婦関係を表しているのではないだろうか。

もちろん、あこきは姫君の母親ではない。けれども、姫君の母親のような存在だとみなせるのである。そのことは、朝の粥を供する場面から確認できるので、順番に見ていこう。まずは、結婚三日目の朝である。

あこき、御手水・粥、いかで参らむと思ひて、御厨子にや語らばまと思へど、おほかたにもおはしまさねば、御粥もよにせじと思へど、行きて語らふ。(中略)

男君、起き給ひて、御装束し給ひて、「車はありや」と問ひ給ふ。(従者ガ)「御門に侍り」と申せば、出で給ひなむとするに、(あこきガ)いと清げにて、御粥参りたり。御手水取り具して参りたり。(道頼ハ)あやしう、便なしと聞きしほどよりはと思す。女君は、いとあやしう、いかでと思ひ給へり。(五五〜五七頁)

結婚三日目の朝、本来であれば男は夜が明ける前に女の家を出る。しかしこの日は雨が降っていたせいもあって、なかなか道頼が帰ろうとしなかった。あこきは御厨子所の下女に相談し、粥を用意する供された粥を、姫君は道頼が帰った後に「少し参りて、臥し」(五七頁)たようだが、道頼が粥を食べたかどうかは、この原文からは

確認できない。しかしながら「あやしう、便なしと聞きしほどよりは」と思っていることから、供された粥を受け入れたことは確認できる。さらに、道頼が帰ったからとはいえ、姫君が粥に手をつけたのだから、道頼も粥に手をつけていた可能性が高いだろう。

次に、結婚四日目の朝の様子を見てみよう。

(道頼ハ)「いかでか出でむとする。人静かなりや」など言ひ臥し給へるほどに、あこき、いといとほしきわざかな、石山へも、今日は帰りおはしぬらむ、人もこそふと来れと思ふも、静心なくて、御粥・御手水など思ふに、急ぎ歩けば(中略)

女、かく隠れもなき所に、人もこそ来れ、いかにせむと胸つぶれて、いと恐ろし。あこきも、いと慌たたくおほゆ。合はせいと清げにて、粥参り、御手水参り、急ぎ歩く(中略)

御膳も出で来にければ、(あこきハ)御厨子所に来て、「あが君、あが君」と言ひて、かの白き米多くに代へて、御台参りに来ぬ。

ものきりは見馴らひたれば、少将の君、便なしとのみ聞きしに、いと心憎く思す。女君も、いかなるならむと。(七二〜七四頁)

中納言一家が石山詣でから帰ってきたことで、精進落としての膳が用意されたことから、あこきは道頼と姫君に朝の粥を供した後、精進落としての膳も供している。道頼は「をさをさ参らず」(七四頁)というところで、少しだけ手をつけたようだが、姫君は「はた起き居給はねば」(七四頁)と、まったく手をつけなかったようである。

さて、本節の波線部を見てほしい。三日夜餅について「今宵、餅いかで参るわざもがな、朝の粥について「御手水・粥、いかで参らむと思ひて」「御粥・御手水など思ふに」と、あこきの「道頼に食事を用意したい」という思いが明確に語られている。しかも「いかで」という副詞が使われることにより、「何としてでも」食事を用意する」という、強い意志が感じられるのである。なぜ、そこまですの用意に執着するのだろうか。三日夜餅は婚姻の儀に必要なものであるから、儀式を成立させるためにも必要であったろうし、朝の粥は姫君に恥をかかせたくないという思いで用意したのであろうが、理由は他にもありそうである。

姫君の母親代わりとして、婿である道頼の食事の世話をきちんと行いたい。このような責任感があつたからこそ、食事の用意に執着したのでないだろうか。あくまであこきは姫君の侍女——正確には三の君の侍女であるが、あこきは姫君に仕えたいと思っている——である。けれども、結婚の準備や朝の粥の用意に奔走するあこきの姿は、侍女としての分際を超え、あたくも母親のようである。

ここでもう一つ朝の粥の場面を見てみよう。四の君と面白の駒の、結婚四日目の朝の様子である。

(中納言邸ノ人々ハ、面白の駒ニ対シテ)巳、午の時まで、手も洗はせず、粥も食はせず、ありとある限り、その御方にとて多かりし人々も、誰かその痴れ者に使はれむとて出で来にも出で来ず。(中略)

少輔(面白の駒)、いつとなく臥したりければ、おとど



(「中納言」)、「いとほし。かれに手洗はせよ、物呉れよ。かかる者に捨てられぬと言はむは、また、たてもなくいみじかるべし。宿世や、さしもありけむ。今は、泣きののしるとも、事の清まはらばこそあらめ」とのたまへば、北の方、「あたら吾が子を、何のよしにてか、さる者に呉れては見む」と惑ひ給へば、(中納言ハ)「悪しきこと、なのたまひそ。かかる者に捨てられぬと言はれむは、いかがいみじかるべき。北の方、「来ずならむ時や、さも思はむ。ただ今は、させまほしくぞある」とのたまへば、未の時まで、人も目見入れねば、少輔、苦しうて出でて往にけり。(一七七—一七九頁)

中納言邸の人々は、面白の駒に粥や手水の用意をすることを拒否している。見かねた中納言が継母に忠告するも、面白の駒へ粥や手水が供されることはなかった。中納言邸の人々は、継母の意を体して粥などの用意をしないのである。この場面から、婿となる男の朝の粥は、妻の母親の責任において供するものと考えられる。

あこきが母親のような立ち振る舞いをするようになったのは、姫君の発言「故上おはせましかば、何ごとにつけても、かく憂き目見せましや」(四六—四七頁)に影響されたからだといえるだろう。道頼が忍び込んで来たのはあこきが手引きをしたからだと勘違いした姫君が、その時みすばらしい姿で道頼を迎えてしまったことについて、あこきに向けて発した言葉である。「母上が生きていらっしやうならば、何ごとにつけても、このようならい目にあわずにすんだでしょうに」と二度と姫君に思わせない。この決意から、

姫君の母親代わりとしての責任感が芽生えたのだと考えられるのである。

さらに、婿である道頼の食事の世話をきちんと行いたいという思いは、第二節で触れた、帯刀の母親から焼米が届けられた出来事もきっかけとなって生じたのではないだろうか。この出来事を思い起こしてみると、帯刀の母親から焼米が届けられたことで、あこきは困惑していた。困惑の理由は、夫の食事の世話をできない嫁だと姑からみなされていると受け取り、妻としてのプライドが傷つけられたからだと考えられる。姫君の母親代わりとして、二度とそのプライドを傷つけられないようにするために、食事の用意に執着したのである。

なお、先ほど掲げた結婚四日目の朝の場面に続いて、姫君と道頼が残した精進落としての膳をあこきがきれいに整え直して、帯刀に食べさせる場面がある。この場面で帯刀は「ここの日ごろ候ひつれど、かくおろしなどや見えつる。なほ、わが君(道頼)のおはしますけなりけり」(七四頁)と語っているが、これは立派な食事が供されたことに対する、冗談めかした発言だろう。「普段はこんなに立派な食事は供されない」ということは、逆に言えば、普段は立派でないながらも食事が供されていることの証ともとれるし、あこきがわざわざ「いと清げにして」(七四頁)供している様からは、あこきの帯刀に対する愛情が感じられる。ここでの二人の会話からは、仲睦まじい夫婦の様子が伝わってくるが、単に仲睦まじさを表すだけではなく、あこきが妻としてきちんと帯刀の食事の世話をしてい

ることを表す場面となっているのかもしれない。

結婚四日目の朝の粥が供されなかった面白のは、結局、四の君と離婚することになる。娘の母親が婿に食事を供することを拒絶することで、娘夫婦の結婚生活が破綻するのである。一方、あこきと帯刀は、物語終盤に夫婦円満で子沢山であることが語られる。『落窪物語』では、妻方の人物、特に母親が食べものを供し、婿となる男がそれを食する場面を描くことで、持続する夫婦関係を表しているのではないだろうかと先述したが、それはこれらの場面からも証明できるのである。

#### 四 おわりに

当然のことではあるが、結婚は夫婦関係を築くための儀式である。しかしながら、『落窪物語』の姫君と道頼の結婚四日間の場面では、食を通して夫婦関係以外の家族関係も描かれている。第一節で見たように、結果として結婚一日目となった日に、帯刀が母親に食べものを所望する場面では、あこきと帯刀の母親の嫁姑関係が浮き彫りになった。

けれども、結婚四日間の場面でも注目すべき家族関係は、母娘（のような）関係であろう。あこきの叔母はあこきを娘のように想い、あこきは姫君の母親代わりとして仕えている。おもしろいのは、これらの関係がどことなく一方通行であることだ。前述したとおり、叔母はあこきに対して「昔の人の御代はりは（中略）恨み聞こゆれ」「いかで対面もがな。いと恋しくなむ」というように、あこき

を娘として引き取りたかったことや、恋しく想っているので会いたいという気持ちを表明している。一方であこきは、物を送ってくれたことに対して感謝の気持ちを述べてはいるものの、叔母に対してどのような気持ちを抱いているかは表明していない。また、あこきは姫君に「わが君に仕うまつらむと思ひてこそ、親しき人の迎ふるにもまからざりつれ。何のよしにか、異君取りはし奉らむ」（一八〜一九頁）と、泣きながら仕えたいと気持ちを訴えている場面があるが、姫君があこきをどう思っているかを描いている場面はあまりない。あこきが叔母に対して、そして姫君があこきに対して、少なからず好意を持っていることは間違いないであろうが、叔母があこきを想い、あこきが姫君を想うほどには、熱心さが見受けられないのである。けれども、この一方通行気味の母娘関係が、姫君と道頼の夫婦関係を築く重要な鍵となっているのだ。

それでは、なぜこれらの関係は一方通行気味なのだろう。叔母はあこきを想い、あこきは姫君を想うことで、姫君は苦境を脱することが可能になる、という物語の仕組があるのである。あるいはまた、このような一方通行気味の関係が、自然な母娘関係を表現しているからかもしれない。親が子供を想うほどに子供が親を想わないことは、ごく一般的ではないだろうか。この二組は本当の母娘ではないけれども、一方通行気味の関係で描くことで、あたかも本当の母娘のように表現されている。

なお、どことなく一方通行でありながら、完全な一方通行ではないことに注意が必要だ。例えば、あこきが叔母に調度品や食べもの



を所望した訳は、それらを入手する手段が他になかったためである。しかし、手助けしたいという気持ちから焼米を送ってきた姑に、困惑をおぼえたあこきである。切羽詰まったからと言って、助けてくれそうな人なら誰にでも泣きつくわけではない。あこきにとつて、亡き母の妹である叔母は、やはり母に近い人であり、いざという時には頼りにできる人なのである。また姫君は、継母によって物置のような部屋に閉じ込められた際に「君、げに、頼む方なく、はらからとでも、あひ思ひたることなし、はしたなげにのみあれば、その人と言ふべきこともおぼえず、いみじう悲しくて、ただ頼むことは、涙とあこきとぞ、心にかなひたるものにて」(一三五頁)と、思っている。あこきも姫君も、本当に困ったときには母親(代わり)を頼りにしており、これも一般的な母娘関係に当てはまる。どことなく一方通行のようで完全な一方通行ではないという複雑さが、より現実的な母娘関係を描き出し、実の母娘でないながら実の母娘のようであるという、独特な母娘関係を表出しているのである。

『落窪物語』の中で、食に関する場面はあまり多くない。そしてそのあまり多くない食に関する場面は、姫君と道頼の結婚四日間に集中していて、独特で多様な家族関係を描き出しているのだが、その家族関係の中心にはあこきが存在する。あこきが食を通じて独特で多様な家族関係を築くことで、姫君と道頼の夫婦関係も、強固に構築されるのである。

注1 拙稿「『落窪物語』の恋愛——あこきの手紙が有する力——」(『成蹊大

学人文叢書14 文化現象としての恋愛とイデオロギー」、成蹊大学文学部学会編、風間書房、二〇一七年三月)を参照のこと。

2 服藤早苗氏は、『落窪物語』にみる婚姻儀礼—平安中期貴族層の結婚式—(埼玉学園大学紀要(人間学部篇)第6号、二〇〇六年一月四

五頁)の中で、「平安中期の貴族層の婚姻儀礼史料は思いの他少ないものの、『落窪物語』には、大変興味深い婚姻儀礼記事が多い」と述べている。

3 『新版 落窪物語』上 現代語訳付き(室城秀之訳注、角川文庫、二〇〇四年二月)六〇〜六一頁。

4 『新編日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』(三谷栄一・三谷邦明校注・訳、小学館、二〇〇〇年九月)三四頁。

5 『新編日本古典文学全集 うつほ物語(3)』(中野幸一校注・訳、小学館、二〇〇二年八月 二四〇頁)に拠った。

※『落窪物語』原文の引用は『新版 落窪物語 上 現代語訳付き』(室城秀之訳注、角川文庫、二〇〇四年二月)に拠り、その頁数を記した。

(しかのや・ゆうき 大学院博士前期課程修了)